

第 1 回蒲郡市東港地区まちづくりビジョン策定委員会 議事録

開催日時	令和 2 年 1 2 月 2 5 日 (金) 午後 2 時から午後 4 時 1 0 分まで
開催場所	蒲郡市生命の海科学館 メディアホール
出席者	<p>【会 長】 ・愛知大学 地域政策学部教授 戸田 敏行</p> <p>【委 員】 ・愛知工業大学 工学部 建築学科教授 安井 秀夫 ・蒲郡商工会議所 会頭 小池 高弘 ・蒲郡青年会議所 理事長 伊藤 健二 ・中部地方整備局 三河港湾事務所長 山口 隼人 ・愛知県建設局 港湾課長 寺西 億人 ・愛知県都市整備局 都市計画課長 齊藤 保則 ・愛知県東三河建設事務所長 中尾 恭啓 ・愛知県三河港務所長 白村 暁 ・蒲郡市建設部長 鈴木 伸尚 ・竹島水族館長 小林 龍二 ・蒲郡クラシックホテル統括支配人 安川 貴也 ・蒲郡市観光協会常務理事 長谷川 恵一 ・蒲郡市総代連合会長 細井 政雄 ・がまごおり市民まちづくりセンター代表 金子 哲三</p> <p>【事務局】 ・建設部 東港地区開発推進室副主幹 権田 吉宏</p> <p>【委託業者】 ・株式会社創建 名古屋本店 1 名</p> <p>【欠席委員】 ・愛知県蒲郡警察署交通課長 中山 肇</p>
議 題	1 蒲郡市東港地区まちづくりビジョン策定委員会会長の選出について 2 蒲郡市東港地区まちづくりビジョン骨子案について 3 報告事項 (1) 「東港地区」にかわるネーミングの検討について (2) 今後の予定について
会議資料	・次第 ・委員名簿 ・蒲郡市東港地区まちづくりビジョン策定委員会設置要綱 ・説明資料 ・市民アンケート調査の結果 (速報) ・PPP とは ・PPP を活用した民間施設立地によるまちの賑わい事例

会議内容	<p>1 蒲郡市長あいさつ</p> <p>本日は第一回蒲郡市東港地区まちづくりビジョン策定委員会にご参加ありがとうございます。本日の午前中に開催された三河港港湾計画検討委員会の委員も多数出席していただいている。策定を進めている東港地区まちづくりビジョンは、三河港における人流・交流の役割を担うもので、三河港港湾計画に密接に関わっている。また、港だけでなく、蒲郡駅周辺の市街地、竹島周辺を対象としており、市民の皆様の関心が高いエリアである。委員の皆様のご見識、ご経験によるご意見をいただきながら、かつての賑わいを取り戻し、魅力あるまちづくりに活かしていきたい。</p> <p>蒲郡市では、市民憲章の3つ目に「みんなの力でまちづくり」というフレーズがある。いろいろな方のご意見をいただきながら進めて、エリアの賑わいを取り戻していく、そういった過程を思い描いている。その前段階として、方向性、進め方について、東港地区まちづくりビジョンを取りまとめていきたいと考えている。積極的なご意見をお願いします。</p> <p>2 事務局説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各委員紹介 <p>3 蒲郡市東港地区まちづくりビジョン策定委員会会長の選出について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・委員からの提案により戸田委員が互選により会長に選出された。 <p>4 会長挨拶</p> <p>会議を進めるにあたり、大きく3点を考えている。</p> <p>1点目は、港の機能である。三河港港湾計画は10年が経過し、改訂の時期となっており、本日の午前中に三河港港湾計画検討委員会が開催されていた。三河港の中で、蒲郡地区は特に人の流れ「人の港」という意味で三河港の核であり、午前の会議でもそのような意見があった。また、港の土地の利用の仕方は港湾計画に関係するように、東港地区のまちづくりは、港の中の機能でもある。</p> <p>2点目は、蒲郡市における位置づけである。東海道の中で、鉄道駅から水際線が最も近い港である。人の集まりと港の関係をどのような起爆剤としていくのか。</p> <p>3点目は、最も重要かもしれないが、近年よく見られる公民の連携、官民の連携である。まちづくりのあり方のモデルとすることで、蒲郡のまちづくりのあり方が変わると思われる。</p> <p>いずれにしても、鉄道唱歌で「海の眺めは蒲郡」と歌われるように、全国的に知られている地域でもあるため、これをもう一度、更に形を持ってデザインされることで、意味の深い計画になると思われる。ご協力をお願いします。</p> <p>5 蒲郡市東港地区まちづくりビジョン骨子案について</p>
------	---

・ 事務局説明

6 意見

A委員：

大きな考え方として、新型コロナウイルス感染症が落ち着いたころに来るアフターコロナの時代は、新しい価値観が生まれ、考え方を変えるきっかけになると思われる。東港地区のあり方についても、これまでの考え方ではなく、新しいこれからの人生の歩み方等を実現できるような場所にならないか。

蒲郡がどのようなまちかを考えた時に、色々なものがあるが、まずは「海」がある。600万人が訪れる県内一の観光地であり、観光のリーダーシップを取ることができる。東三河地域にあるが、東三河地域の西端にあるため西三河との架け橋になることができる。観光のマーケットの視点で考えると、東三河地域76万人、西三河地域100万人、その背後に浜松市や名古屋市がある。それらを踏まえて、どのような海辺になってもらいたいかを考える。

まず、「市民」という定義を考えたい。住民8万人だけを対象とすればよいのか。これまでは600万人の観光客を消費者と捉えていたが、観光客も非日常ではあるが、生活の一部として、蒲郡で1日を過ごしている住民として考えてはどうか。市民の定義を変えていきたい。

蒲郡は小さなまちのため、小さなまちだからできることを考える必要がある。蒲郡では、100%のプレミアム付商品券・食事券事業を実施した。これは大都市ではできない取り組みであり、蒲郡だからできたもの。単に大都市と比較するだけではつまらなく感じてしまう。

海は刻々と変化し、眺めているだけでも精神の自由というものを感ずることができる場所である。海を眺めながら、生活の豊かさや質等を自分で意味付けすることができる。そのため、これからの観光は価値観を押し付けるのではなく、自分で意味付ける機会づくりができることとよい。経済的な富も必要であるが、精神的な富の積み重ねができるまちといったことが、海辺のまちづくりを通してやっていけたらよい。賑わいというが、どれぐらい賑わえばいいのか。人が多ければいいのか。平日と休日を分け、平日は一人で過ごすことができるようにしてはどうか。特に竹島周辺は変えていった方がよい。

来訪者は遊びながら色々なことを学んでいる。例えば、水族館では色々なことに取り組んでおり、誰も水族館に学びにきているとは言わないが、新しい発見を体験している。仕掛けをすることが大切である。

どのような賑わいがあればいいのか。人が来るだけでいいのか。観光客600万人があとどのくらい増加すればいいのか。そういうことではなく、竹島をもう一度蒲郡のシンボルとして、蒲郡は海辺を歩くことができるまち、「蒲郡に住んでいていいね」と言われる場所を作っていくことが、東港地区のまちづく

りに一番大切だと思っている。

この意見がよいのか、市民の賛同を得ることができるのか分からないが、変えてみてはどうか。

B委員：

まちづくりについて町部の総代達で昨年11月より、5～6回話し合ってきた。蒲郡駅を降りて、東港を通り、水族館まで自然に流れる動線づくりをしてもらいたい。そのための賑わいをどのようにすればよいか。イベントをすればよいということではない。何気なく歩くことができるまちづくりをしなければいけないと感じている。

観光客は10年前の700万人が今は600万人となっているが、蒲郡を訪れても、食事をするには近くに手軽に行ける店舗がない。土産に蒲郡みかんも買えない。美味しい魚を食べることができる大衆食堂が近くにない。そのあたりのことを考えないと、市民の立場からは残念である。

アンケートにおいても散歩の意見が多いように、散歩がしたくなるまちであり、高齢者の増加を考えると、蒲郡は海と山に囲まれており、大きくなることはできないまちのため、小さなまちづくりとして、駅周辺は高齢者が行けるようなまちづくりの工夫を視野に入れる必要がある。

20年後の将来、今の子供たちによかったと言われるまちにして欲しいと感じた。

C委員：

「4.対象地域の歴史」において、大正10年には、伊勢神宮までの航路があったなど、100年以上船に関わる歴史がある中で、1年程前には、クルーズ客船のダイヤモンドプリンセスが来港した。海側から見る蒲郡の機会は少ないが、市民、観光客が海側から蒲郡のまちをみることができるよう、船を利用した考えを組み込んでもらいたい。歴史を振り返って活発になればよいと思う。

蒲郡市観光協会と蒲郡市では、三河湾国定公園が55周年を迎えた時にGOGO三河湾協議会を設立した。年に1回、蒲郡市と西尾市と田原市と南知多町の4つの市町で三河湾をクルージングすることにより海で繋ぎ、観光客を招こうという動きをしている。これを少し拡大できればと考えている。

D委員：

様々な事業に取り組む中で対象者が誰なのかを明確にしている。市民を対象とする場合は、高齢者、中間層、子供、どのような方の目線で見るとかを定めなければ事業が頓挫する。また、「市民と一緒に」というところが一番難しいところである。市民の思いをそのまま具現化すると様々な障害も出てくるが具体化できないと不満につながっていく。明確にして市民の同意を得ると同時に、継続性が大事である。1年目は市民の方と協力して実現できても、根底が定まっていないと2年目は引き継ぎがうまくいかないという経験している。逆に言えば、そ

こがクリアになれば魅力のある場となる。利用したい場所であり、魅力ある場所にするため、しっかりと検討していきたい。

意見としては、対象者が誰なのか、市民との巻き込み方について具体的に詰めていきたい。

E 委員：

蒲郡には、水際のよい景観があるため、皆さんがゆっくりすることのできる質の高い歩道があるとよい。従来の質の高い歩道は費用をかけて石材の舗装やフェンス、ベンチ等を設置していたが、ポストコロナの時代では、芝生をきれいに整備しただけで、自由に活用されている事例もある。あまり作りこまず、自由に利用できる余地のある空間がある方が発展性、応用性がある。

蒲郡では、新幹線が少し高台となっている位置を通過しており、景色がきれいである。船からもよいが、上から見ることで蒲郡を見直すことができるのではないか。

F 委員：

子供の頃は蒲郡市で過ごし、一度東京に引っ越したが、10年前に大学に戻り、改めてまちを見ている。蒲郡について同世代と話すと、都会の人は蒲郡のことが分かっていないと言われることもあるが、地元にいる人は閉鎖的で能動的には考えていない印象である。能動的に動くことにヒントがある。受動的で成績の良い学生はアイデアを持っていないことが多い。成績が悪くても能動的に動く学生の方が展開力を持っている。市民も外部からの考え方を取り入れて能動的に動く必要がある。

国交省がサポートして、歩くまちづくりのコンペが他都市で実施されている。コンペの内容を実際に作ろうとするものではないが、コンペ案を市民に見せることで、意識を高め、一緒に議論することもよいのではないか。

A 委員：

先日、蒲郡ベンチアートプロジェクトを新聞発表した。蒲郡を歩いていると海の眺めがよい場所が多くある。

今年度内に、市民等、蒲郡に関わる人にベンチを置いてほしいと思う場所を募集する。その場所に建築家や芸術家の方にアートのインスタレーションとしてベンチを作ってもらおう。座った人は、本を読むのと同じで、景色と対峙して自分の中で色々なことを意味づけしていくインスタレーションとして蓄積する。その場所を蒲郡でつくっていかうというもので、1年に10個作れば、10年で100個できる。海岸だけでなく、山側にあってもよい。10年かけてつくっていきたい。

このプロジェクトの話をするると、賛同してくれる人は多く、来年は周年の事業で取り上げてもらえるところもある。色々な方に参加していただいでみんなで作っていきたい。メンテナンスをどうするのか等の意見もあるが、ここに作って欲しいといった人達が週に1度、掃除をするなどしてはどうか。例えばインスタグラム等でその人なりの積み重ねが出来ていくといいと

思っている。

小さなプロジェクトであるが、費用を掛けずに取り組んでいきたいと考えている。また、このようなプロジェクトがきっかけとなり、例えば、蒲郡はロープのまちであるため、コンクリートの壁を漁網で覆う等、見苦しい場所も漁網アートにしようなどといったことから、まちが変わってくると思う。

竹島エリアの竹島橋周辺は海辺の文学記念館、市の公園、蒲郡クラシックホテルがある。眺めがよいため、キッチンカーでもよいが、全面ベランダのカフェがあるとよい。国定公園であるため、カフェの設置ができないと聞いているが、皆が欲しいものはいつか実現すると思っている。蒲郡のホテルでもワーケーション等の取り組みがある。海の眺めの良い場所で仕事をしたり、勉強を図書館ではなく、景色のよい場所ではどうか。そうした場所を、活かさない手はない。

駅からの動線を考えながら、竹島を中心としてはどうか。駐車場を移転すれば場所が確保できる。駐車場周辺は竹島で一番景色がよいため、それを活かすとよいと思う。

蒲郡ベンチアートプロジェクトへの参加もお願いしたい。

G委員：

説明資料の中でバリアフリーポンツーン マンボウが紹介されていた。整備した目的は市民の注目を海に向けるためであった。如何に防波堤を越えて海を意識してもらうソフトを形成するかに苦労している。例えば、市民意識は3日間では変わらないため、何年もかけて意識を継続して持ち続けなければいけない、継続するソフトをどのように作っていくかが重要となる。

その中で、バリアフリーポンツーン マンボウは市民の要望ではなく、全国の人々がチャレンジする場所として整備された。客や消費者ではなく、企画を実現する場所である。いままでの対象者は絞り込みであったが、如何に関係性を深め、拡大していくことがこれからの時代である。市長が言う「みんなの力でまちづくり」は、色々なエネルギーを使いたいという発想であり、1つのエネルギーでは継続性が難しい。市民の協力を得て取り組む中で、すぐに事業化できることは難しく、キャッチボールを続けていくことが必要である。

蒲郡ではセントラルパーク的な場所がないことを考えると、この場所は市民にとってセントラルパークのような場所であってもいいのではないか。これまで、ありとあらゆるチャレンジが取り込まれているが、3回以上続くものがない。如何に10回、20回、100回、日常的なものに落とししていくには、キャッチボールしていく（意見を交換する）場所、コーディネーター、人々の発想に柔軟に対応するステージづくり、先の目標、これらがあると魅力的に映っていくのではないかと思われる。キャッチボール相手と育てるシステムを作れるとよい。

蒲郡市は福祉にも取り組んでいるため、港ではなかなかなかった発想として、港と福祉の港福連携を1つの価値観としてチ

チャレンジしてはどうか。昨年、港湾の高田局長へ提案をしている。

H委員：

東港地区は、市民が誇れるような、場所でありたいと思う。竹島や蒲郡水族館等が、お薦めのスポットであるが、セントラルパーク的な場所となるとうれしい。動線（松原線）を綺麗に整備しているが、あまり歩いている人はいないのが実態である。観光業で、参考になったのは、島根県境港市の駅と記念館を結ぶ水木しげるロードである。店が並ぶ必要はないが、何かしらを考えていけるとよい。

先日開催された市民まちづくりフォーラムで、学生による東港地区の開発提案のプレゼンテーションにおいて、観光のためだけではなくフットサル場等があったように市民が集まる場所になればよいと感じた。

海辺の文学記念館の東側の土地については、何か使えるとよいと思いつながら、市・県の制度上、建物の用途が宿泊施設であることや、ホテルの増築であること、上下水の整備等の課題があり、なかなか活用できていないが、皆様の知恵をお借りできればと考えている。

I委員：

今日は歴史の説明が多くあったが、過去の海への思いの中にヒントがあるように思われる。アンケート結果では、「海辺のみなとエリア」、「竹島周辺エリア」を利用する頻度を見ると、散歩での利用はある程度あるが、ほとんど利用しない人が多い、これについては居住地によって、傾向が見えてくることも考えられる。説明のあった主要回遊動線でエリアを繋ぐだけでなく、エリアにどのように入ってくるのかなどアクセス性についても分析するといいいのではないか。

説明資料の8頁にみなとオアシスが記載されている。制度の細かいことを確認する必要があるが、海辺の文学記念館は歴史や地域の良さを感じられることもあり、そのようなところも含めて、みなとオアシスを広範囲でリニューアルできるとよいため、確認していきたい。

海辺のみなとエリアでは、歩く以外の利用もあるが、健康増進につながるのだと思われるが、そのような話は入っていない。観光だけではなく、健康等とあわせることで、新しい価値がでてくると思われる。

J委員：

歴史を見ると、昔の方が海に関わって、豊かな生活、時間を過ごしていたことが分かった。これまで開発をしてきているのに人が海に行かないのは何故か。「見えない大きな防波堤」があるのか、市民も観光客も海に目が向かないことが1つのポイントだと思われる。逆に海を活かす必要がある。仕事で嫌なことがあると海を眺めたり泣いたりすると、心がリフレッシュされ、帰宅後、家族と楽しく過ごせて、明日からの元気が出る等、自

分を見つめ直すことができている。そのようなことができるのは、海の魅力である。

プロジェクトを行う場合、大きな施設をつくり、人を呼ぼうとなりがちであるが、大きなものがなくてもベンチがあるだけで、幸せになれることが時代にあっていると思われる。小さなまちであるため、大きなものを作ってしまうとやり直しができない。そのため、費用をあまりかけずに、更新していくことで、年々コンテンツが増加や変化して、進化していくことが蒲郡のやり方にあっていると思われる。

一方で、水族館は費用が掛かる施設だが、地元の方も観光客も老若男女、障害の有無を問わず、誰もが行くことができる施設であり、集客性は他の施設よりも高い施設である。現状、多くの人に来てもらっているが、海や他の観光施設につながっていない。水族館をうまく利用して、海や蒲郡全体に人を広げて、そこで色々なことを思ったり、悩みが晴れたり、一緒に来た人と幸せになれるなどにつながる仕組みができるとよい。

K委員：

まちづくりビジョンに余白を残して、余白を市民の方と埋めていきたいというのはよいと思ったが、余白がどこにあるのかが見えなかった。対象者についての意見があったが、余白が見えないため、対象者が見えないのかと感じた。

海辺のみなとエリアは行政課題が多くあった。話の中で竹島周辺の課題もあった。海辺のみなとエリアの行政課題をピックアップするのであれば、竹島周辺エリア、蒲郡駅周辺市街地エリアについても示したほうがよいのではないかと。

L委員：

市外在住であるが、蒲郡について聞かれると竹島水族館しか思い浮かばない。人に集まってもらうには、遊覧船や昔の海水浴場があったため人工リーフを作るなど、単に海があるだけでなく、目的を持って訪れる動機付けが必要である。

食についても、名古屋メシ等の名物があると行きたくなる人もいるため、例えば、三谷水産高校と新しいものを開発する等の動機付けができるとよい。

駅から海が近いが、駅を降りて、海に行きたくなる環境ではない。人が行きたくなる、誘導する動きや気になる仕掛けづくりをつくるとよい。また、神戸等の他の港の有名な箇所を調べて、他の港町にあって、ここに欠けているものを考えながら港をつくる必要があると感じている。

海や歴史があり、色々な資源があるため、3つのエリアを有機的に結びつけるものを考えることができるとよい。

M委員：

個人的な感覚であるが、今のふ頭用地は何も使われていなくてもったいない。蒲郡港の歴史において、蒲郡市と愛知県でポートルネッサンス 21 やインナーハーバー計画に基づき、埋立等の整備をした経緯があるが、現在の状況では非常にもったいな

い。皆さんで知恵を絞って検討することが今回のまちづくりビジョンの趣旨だと考えている。

今の港湾計画では、港湾関連用地の位置づけである。説明資料9頁に記載されているように、交流厚生用地に位置づけていけば、皆さんがイメージされる施設や利用につながっていくと思われる。港湾計画の改定を進めており、そのスケジュールにあった形で利用計画を変えていきたいため、ご協力いただき、今のもったいない状況を変えていけるとよい。

健康の観点から、駅からこれだけ近くに海があるため、駐車場を作らずに市民の方も市外の方も歩きや自転車で周ることができるようにするとよい。

会長：

一通り、皆様よりご意見をいただいた。ありがとうございます。位置づけの議論からプロジェクトの提案、広域をターゲットとする考え方、制度上の考え方の意見もあった。事務局でご意見を踏まえて、次の作業を進めてもらいたい。

7 報告事項

「(1)「東港地区」にかわるネーミングの検討について」、
「(2) 今後の予定について」について報告した。意見は特になし。